カフカとシュレーバー
―カフカの『巣穴』とシュレーバーの『回想録』―

河　中　正　彦

Ⅰ）カフカの『巣穴』の素描

ここで取上げる『巣穴』は、カフカの最晩年の作品で、1923年11月下旬から12月下旬にかけて成立したと推定されています。『巣穴』では、穴熊ともモグラともつかない穴居動物が、地下に複雑極まりない構造をもった巣穴を掘るのですが、「私」を名乗るこの動物は、カフカ研究者たちの一致した見解では、カフカ自身の「自画像」であると考えられています。

この巣穴の中央の広場はBurgplatz（城―広場）と呼ばれ、そこから100mおきに小さな広場が50位あって、それらはお互いに通路で結ばれている。このような構造を備えた巣穴を、カフカ研究者たちは一致して、カフカの文学作品の隠喩であると見做しています。

なぜならこの巣穴と「私」なる動物との一体性は、作品の中でしばしば反復されているからです。「私と巣穴とは、たとえどんな不安があろうとも安んじてここに居を定められるだろう程に、一体をなしている。」（…ich und der Bau gehören so zusammen, daß ich ruhig, ruhig bei aller meiner Angst, mich hier niederlassen könnte,…）（N Ⅱ 602）　また「いかなる他人にも属すことのありえない、かくも私のものである、私の城」<…, meine Burg die auf keine Weise jemandem anderen angehören kann und die so mein ist,… >（N Ⅱ 601）とも述べられています。他にも挙げられます（N Ⅱ 605）が、これで充分でしょう。

カフカほど自己作品と自分自身の一致、一体性を強調した作家は稀です。カフカはフェリーツェ・バウアーに宛てて、「私が長編小説なのであり、幾つかの物語が私なのです。……どこに嫉妬の余地がわずかでもあるでしょう。」（**Der Roman bin ich, meine Geschichten sind ich**, wo wäre da,.…… der geringste Platz für Eifersucht.）（F 226, 1913-1-3）と書いています。

巣穴が作品の隠喩だとすれば、巣穴を掘るという行為は、「書く」という行

為に対応します。実際カフカは、フェリーツェに宛てて、こう書いています。「再び私は静かな住まいに座って、改めて穴を掘ってもぐり込もうとしています。」<Wieder saß ich in der stillen Wohnung und suchte **mich** von neuem **einzugraben**.> (F 626, 1915-2-11) これはプラハのビーレク・ガッセの妹ヴァリの家に、自分の部屋を一室確保したときの手紙です。「書くこと」は、sich eingraben、つまり動物が「穴を掘ってそのなかにもぐり込む」ことに喩えられています。またある手紙には、「いままさに私は、巣穴のなかの絶望した獣のように、駆け回るか、石にでもなったように座っている。」(Br.390 1922-7-12) とも書かれています。

この辺までは、Emrich, Politzer, Fingerhut, Binder などのカフカ研究者(注1)も意見が一致しています。カフカ研究者の意見が分かれるのは、この先です。

II) 巣穴を窺う敵と主人公の不安

さきほど「私と巣穴とは、たとえどんな不安があろうとも、安んじてここに居を定められるほどに、一体をなしている。」という箇所を引用しましたが、ここで語られている「不安」とはいったい何でしょうか？この穴居動物には敵がいるのです、しかも「外部の敵」と「地下の敵」がいるのです。作品の最初の部分で、すでに作品後半に現れる敵が軽く触れられています。「私を脅しているのは、外にいる敵だけではない、地中にもまたそんな奴がいるのだ。」(N II 578) つまり二種類の敵がいるのです。しかし重要なのは、地中の敵で、作品中の「私」はその姿をみたことはありません。しかし「伝説」はその敵について語っていて、「私」はそれを堅く信じています。引用しますと「彼らの蹴爪の引っ掻く音が自分のすぐ下の地中に聞こえるや否や、もう最後(**verloren**)なのである。」(N II 578) テクストは、この敵の蹴爪が引っ掻く音が自分の下で聞こえただけで、もうこの穴居動物の敗北が決定付けられている、と語っています。なぜこの敵はこんなにも致命的な敵なのでしょうか？

これはカフカが用いている即決裁判(**Standrecht**)という語、あるいは「即座の処刑」**<sofortige Hinrichtung>**(T 896, 1922-1-29) という表現を強く想起させます。

前者は、「私たちの時間概念が私たちに＜最後の審判＞をそう呼ばせているにすぎない、本来それは即決裁判である。」(Nur unser Zeitbegriff läßt uns das Jüngste Gericht so nennen, eigentlich ist es ein Standrecht. (N II 54, 122)) とい

う断章に現れ、私たちが倫理的な自己総括を時間的な遥かかなたへ投影していることを戒め、その不当性を指摘したものです。

後者は、1922年カフカがシュピンデルミューレという保養地で、雪道を歩きながら、ある自己認識に達したときの感想です。その自己認識とは、カフカが「人間に見捨てられている」のではなく、これなら最悪のことではないが、「人間たちとの関係において、自分自身に見捨てられている」という自己認識でした(T 895)。ここを踏まえて、次のページでは、「もし雪道でそうかもしれないとおもえたことが、じっさいにそうだとしたら、それは恐ろしいことだろうし、私はもう最後(verloren)だろう。これは威嚇(**Drohung**)としてではなく、＜即座の処刑＞**<sofortige Hinrichtung>**と把握されるであろう」(T 896)と述べられています。

「自分自身に見捨てられている」などという言葉は、絶対に自分自身から聞き取りたくない言葉です。そういう言葉を聞いてしまうことは、「自分自身から自分向けの復讐者を送り出す」(T 906)様なもので、聞き取ってしまった言葉が、自分を打ちのめす敵なのです。このような事態を、カフカは「幽霊たちが言葉の向きを変える」という比喩で語っています。「どの語も幽霊たちの手で向きを変えられて、槍となって、話者にむかって跳ね返ってくる。」(T 926)本論では、自分を打ちのめし、自分を解体してしまうような自己認識、自己観察が恐るべき敵である、という仮説のもとに推理を組み立てていきます。

つぎに問題なのは、威嚇(**Drohung**)と＜即座の処刑＞**<sofortige Hinrichtung>**の関係です。『巣穴』は二つの部分からできています。前半では、巣穴の構造が説明され、巣穴をもっと安全なものにする様々の工夫が語られます。後半ではこの地中の敵がたてるのであろうと推定される「シューシューいう音 Zischen」が主題的に前面に押し出されてきます。Fingerhut というカフカ研究者はこの Zischen を、「威嚇する裁きの暗号」**<Chiffre des bedrohenden Gerichts>**(„Die Funktion der Tierfiguren“ 1969 S.291)と解釈していますが、大筋においてそれは正しいと思われます。主人公がこの音を威嚇として感ずるのは、敵が正体を現すだけで、彼の敗北は決定的だからです。カフカ研究者の意見が分かれるのは、この地中の敵の正体は何かという点です。

Ⅲ）威嚇としての Zischen

このZischenの特徴は、いくつかの点に纏められます。

1）このZischenは、極めて「かすかな音」です。「聞こえるか聞こえないかのこのかそけき音」<ein an sich kaum hörbares Zischen>(N Ⅱ 606)が、主人公である穴居動物をパニックに陥らせるのです。このZischenはまた、「その職分を行使しつつある家の所有者の耳でしか聞こえない」(N Ⅱ 606)とも語られています。これはカフカの筆がふと秘密を漏らした箇所であり、このZischenが幻聴で、音源は自分であることが暗示されているように思えます。

2）第二の特徴は、このZischenが、巣穴のどこでも同じに強さに聞こえ、昼夜を分かたず規則正しく聞こえることです。作品の後半の展開は主人公が、Zischenの音源を推理する過程として進んでいきます。

a）最初主人公はこのZischenが、どこでも同じに聞こえるのは、音源が二つあって、一方から遠ざかると他方の音源に近づくから、その総和(Gesamtergebnis) (N Ⅱ 609)が近似的に同じなのだと推理します。

b）次に、彼はZischenが小動物の大きな群れから発するのだと仮定します(N Ⅱ 613)。しかしそんなに大きな群れが移動しているなら、その一匹ぐらいは見つかってもよさそうなものですが、一匹も見つかりません。(N Ⅱ 614)

c）そこで主人公はその仮定を捨てて、浸水が原因ではないかと疑い始めます。(N Ⅱ 622)しかしこのZischenを、水のせせらぐ音Rauschenだと解釈し直すことはできないという結論に達します。

d）そして最後に、このZischenが一匹の大きな動物に由来するのではないか、という仮定に行き着きます。(N Ⅱ 623)到るところで同じ音で聞こえるのは、主人公の周りをぐるぐる廻っているからだと彼は仮定します。ここに至って、作品冒頭で示唆された伝説上の「地中の敵」に作品は回帰します。敵との談合・示談が夢想されますが、じっさいには「お互いの姿を見るや否や、……蹴爪と歯をむき出しにした」(N Ⅱ 630)闘いが開始されるであろうことが暗示されています。これは冒頭で暗示された「即決裁判」を再度暗示しているものではないでしょうか。作品はここで中断しています。

さて主人公が、その音源を強迫的につきとめずにはいられないこのZischenとはなんでしょうか？主人公は、どこでも同じに強さに聞こえ、昼夜を分かたず規則正しく聞こえるZischenの音源が、まさか自分自身であるとは考えていません。カフカが、自分に聞こえる「威嚇」の音源を自分ではないかと疑った

箇所があります。それは「弁護人」という不可解な小品のある箇所です。(この場合は **Dröhnen** です)

「(ここが) 裁判所だということを私に一番思い起こさせるのは、遠くから絶えず聞こえるどよめき (**Dröhnen**) だった。どの方角からかは言えないが、それはあらゆる空間を満たすので、至る所から響いてくると仮定できるが、あるいは、偶然自分の立っている場所こそこのどよめき (**Dröhnen**) の本来の場所だというほうが正しく思われた。しかしそれはきっと錯覚だろう、どよめきは遠くから聞こえてきたから。」(N Ⅱ S. 377～8)

この「どよめき」は、その方位が確定不能である点と「遠くから絶えず聞こえる」性格とから、Zischen に酷似しています。なぜこのどよめきは遠くから聞こえてくるのでしょう？カフカはミレナにこうかいています。

> 「あなたは何が問題になっているか、あるいは部分的にいたか、正確には解っていません。私自身にも解っていないのです。私は＜勃発＞(**Ausbruch**) のせいで震え、気も狂うほど自分を責めさいなんでいます。それがなに であり、それが遠くでなにを望んでいるか、私は知りません。それが近くで望んでいることは知っています、静けさ、闇、這って身を隠す(**Sich-Verkriechen**) ことです。」(M 266～7, 1920-9-18)

カフカが挙げた「それが近くで望んでいる」三つの項目、静けさ、闇、這って身を隠す(**Sich-Verkriechen**)は、まさに『巣穴』の状況です。「それが遠くでなにを望んでいるか」は、遠くから聴こえる Zischen と関係があります。手紙はまだ続き、ここに「地底からの威嚇」(**das unterirdische Drohen**)が言及されます。

> 「それは勃発であり、過ぎ去りつつあるし、一部は過ぎ去っています。しかしそれを呼び覚ました力の方は、相変わらず私のなかで振動しています。勃発の以前も以後も。私の生、私の現存は、この地底からの威嚇で出来ています、この威嚇が終われば、私もおしまいです、それは私が人生に参加する仕方なのです。」 (M 266～7, 1920-9-18)

この威嚇とは、カフカが「真実の感情」と呼んだものと同じ位置にあり、だからこそ「この威嚇が終われば、私もおしまい」なのです。

> 「この表面 (註－人間と人間の直接の交わり) から＜書くこと＞のなか

へと取ってきたものは、(……) なにものでもなく、真実の感情(**ein wahres Gefühl**)が、この上部の地盤を揺るがす瞬間に、瓦解してしまいます。」 (F 250, 1913-1-14〜15)

真実の感情とは、ひとが自分自身にさえ秘めている耐え難い真実ですから、一見堅牢に見える上部構造としての自我を一挙に揺るがし、瓦解させてしまいます。すでに提示した仮説、「自分を打ちのめし、自分を解体してしまうような自己認識、自己観察が恐るべき敵である」という仮説とここでいう真理のイメージは重なるのではないでしょうか？

それは姿を見せただけで敗北が運命付けられている恐るべき「敵」です。真実という「より深い源泉」(F 250)が語り始めなければ、作品は不可能ですが、そこに語られる真実はカフカ自身に「恐ろしい声」(M 42)、「内なる声」(F 458) として体験されるのです。この声の前駆症状が「威嚇」として、『巣穴』で Zischen として現れてくるのではないか、というのが私の見解です。

この問題は、次でもう一度取上げます。

3) 第三の特徴は、間隔の問題です。「ときには雑音がやんだように思う。長い間合いを置くのだ。またときには、耳の中で自分の血が鼓動する音が強すぎて、その Zischen を聞き逃すことがある。」(N Ⅱ 618) この **Zischen** が、絶えず途切れ目なく発生しているのに、主人公が時折聞き逃すのか、それとも実際に途切れ目があるのか、この同じ問いをカフカは「声」に関して発しています。「私は一致(**Einigkeit**)を歓迎すべきなのに、一致を見出すと悲しい」で始まる『遺稿』の対話的断章(N Ⅱ 85-87)で、カフカは、次のように述べています。

「それは持続的(fortwährend)な戒律なのか、単に断続的な(zeitweilig)な戒律なのか？」
「それは私にも決められない。私の信じるところでは、それは持続的な戒律だが、私が断続的にしか聞かないのだ。」

ここで「戒律」(Gebot)とカフカが呼んでいるのは、「こうせよ」と命じる(**gebieten**)声です。

ここで初めて「声」と Zischen の関係が本質的な意味で前面に出てきます。またシュレーバーとの関係もこの延長にあります。

カフカにはたぶん絶えず「声」が聴こえていました。

> 「私（の結婚）を妨げたのは、事実ではほとんどありません。それは恐れ、幸福になることに対する打ち勝ちがたい恐れであり、より高い目的のために自分を苦しめたいという欲求、命令なのです。……内なる声は闇へ行けと命じ、しかし現実にはなにか(es)が私をあなた（＝フェリーツェ）の所へ引き寄せるのです。」　(F 458, 1913-8-28)

ミレナへの手紙にはカフカはこう書いています。

> 私は内部の恐ろしい声に耳を傾けながら、同時にあなたの声に耳を貸すことはできません。しかし私はあの声を聴いて、それをあなたに打ち明けることはできます。」　(M 42, 1920-7-3)

この「声」と Zischen の関係はどうなっているのでしょうか？

Ⅳ）カフカとシュレーバー　「声」と Zischen

フロイトは1911年に「自伝的に記述されたパラノイアの一症例にかんする精神分析的考察」(Freud: Gesammelte Werke Ⅷ 239-320)で、シュレーバーの『回想録』を分析しました。

このシュレーバーとは、ダニエル・パウル・シュレーバー (Daniel Paul Schreber 25. Juli, 1842～14. Apr. 1911)のことで、有名な父ダニエル・ゴットロープ・モーリッツ・シュレーバー(Daniel Gottlob Moritz Schreber 1808～1861)の息子です。父モーリッツはドイツのザクセンの医師で、教育家であり、土地のないひとが借地して小さな農園で農業を営めるシュレーバー・ガルテンにその名を残しています。教育家として、『運動療法論』(1852)、『医学的室内体操』(1855、40版、30万部のベストセラー）などの書で、体操の考案と普及に努めています。こういう厳格な父に育てられると、極度に自己抑圧的な人格が形成されるのは、容易に想像できます。

息子のシュレーバーはライプツィッヒ大学を卒業後、同地の控訴審裁判所に勤務します。42歳のとき帝国議会議員選挙に立候補し、落選したあと、発病し、大学付属病院の精神科主任フレヒジッヒ教授のもとに入院します。二度目は51

歳のとき、ドレースデンの控訴院の部長に就任したとき、この異例の昇進が重荷になって、再発します。

カフカとシュレーバーを比較すると、多くの共通点が浮かび上がってきます。

a）二人とも法学博士であり、法律家で官吏です。

b）二人とも、厳しい父に育てられ、禁欲的な生活を送りました。シュレーバーの父は厳格で、「私ほど厳格で道徳的な原理に従って育てられた人間はまずないであろうし、とりわけ性的な方面について、生涯を通じて、こうした原理にのっとった自制を、私ほどに自分に課してきた人間もまずいまいと思う。」(Schreber: Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken. Erste Ausgabe 以下 EA.と略記。S.281 尾川浩＋金関猛　訳)と『回想録』で述べています。カフカの父は厳格なというより、粗野で短気で怒りっぽく、道徳的に厳格なというのとは違いますが、息子に対して威嚇的な存在であったのは、確かです。カフカはカフカで、「一緒にいることの幸福に対する懲罰としての性交。できるだけ禁欲的に、独身者より禁欲的に生きること、これが私にとって結婚に耐えられる唯一の可能性だ。」(T. S.188　1913-8-14) と述べています。

c）また二人とも、心気症（ヒポコンデリー）的な念慮と、極度の知覚過敏（光と騒音に対する極度な過敏さ）に苦しんでいました。

d）さらに二人とも、「変身」妄想に襲われています。カフカは作品『変身』で主人公グレーゴル・ザムザを虫に変身させ、シュレーバーは、自分が女性に変身したと妄想しますが、これらの妄想に襲われたのは、二人ともベッドのなかです。カフカは『変身』を、「ベッドのなかで悲嘆にくれているときに思いついた」(F. 102)と書いているし、シュレーバーは「性交に屈する女性であることはなかなか素敵にちがいない」(Schreber, EA. 36)という想念に夢うつつの早朝のベッドで襲われます。

e）さらに二人とも「思考強迫」に悩んでいます。シュレーバーは「思考強迫……絶えざる思考へと無理強いされている」<**Denkzwang**,……eine Nötigung zu **unäblassigem Denken**>(Schreber, EA. S.216)と述べ、カフカは「絶えざる思考の強迫」<**unaufhörlichen Zwang des Denkens**>(T. 852)と書いています。この間断なき思考強迫こそ、「声」が絶えず語りかけてくる現象とパラレル

です。

f）彼らは外部のすべてを自分に関係付けます。カフカは『日記』に、「総てのものが等しく私に考えさせる」**Alles gibt mir gleich zu denken.**(T.569)と書いていますが、これは思考強迫であると同時に、彼が総てのものを自分に関係付けて考えるからです。これはパラノイアの「自己中心性」と誤って呼び習わされているものです。シュレーバーの場合は、すべてを彼に結びつけるのは、彼自身ではなくて、「神」だと主張しています。

g）迫害妄想（パラノイア）

カフカの迫害妄想はこのように述べられています。

> 私は両親をいつでも迫害者として感じていました。…両親は私を自分たちのところに、私がそこから息を継ぐために浮かび上がろうとしている古い時代に、自分たちのもとへ、引きずり降ろすこと以外には何一つ望まず、もちろん彼らは愛情からそうするのですが、これが恐ろしいことなのです。　(F 112　1912-11-21)

パラノイアについてのフロイトはこう語っています。

> 迫害性パラノイアの場合は、患者はある特定の人との強い同性愛的結合をある仕方で防いでいるが、その結果かつて激しく愛した当の本人は迫害者になり、この人に対して患者はしばしば危険な攻撃の矢を向ける。
> (GW XⅢ S.271, フロイト著作集6-287)

カフカはしかしこの「迫害妄想」に自虐（メランコリー）を対置することでパラノイアを逃れます。

> 「私が書いていることの総てから、私が迫害妄想にかかっていると思ってはならない。どんな場処も必ずなにかに占拠されていることを、私は経験から知っている。だから私が、私の鞍のうえに坐っていないときには、いやそのときにのみ迫害者がそこに坐っているのだ。」
> (Brod /Kafka: Briefwechsel　S.313)

「私の鞍のうえに坐っていないときには」という表現は、カフカの初期の『ある闘いの記述』の「騎行」という章を想起させます。この箇所(N I 72-3)で、「私」は「知人」の肩に馬乗りになって、長靴で腹に拍車をかけ、頭を殴りつけ、頚を締めて殺してしまいます。作品の「知人」は、「私」同様、カフカの分身ですから、「私」が「知人」に馬乗りになって、彼を痛めつける行為は、自虐を意味していると考えられます。自虐はメランコリーの兆候ですから、引用したカフカの書簡の箇所は、メランコリー（自虐）とパラノイア（迫害妄想）の分水嶺を示していると推定できます。『巣穴』には、巣穴の外に出た主人公が自虐的に茨の茂みに飛び込む箇所があります。「わざと茨の茂みに飛び込み、わが身を罰する。自分の知らない罪に対する罰である。」(N II 595)この自罰があるかぎり、カフカはたとえパラノイアに傾斜しても、そこから距離を置けるのです。

h）**Zischen**

シュレーバーは自分が精神病（パラノイア）を患った体験を、正常に返ったときに回想録に綴った手記のなかで、この同じ Zischen について書いています。シュレーバーには絶えず幻聴があって、この声が間遠になるとき、その間合いにこの Zischen を聴くのです。カフカとシュレーバーの Zischen は同じものなのでしょうか？それとも違うのでしょうか？

シュレーバーは「声」についてこう書いています。

> 「話す速度が遅くなるということは、第16章で述べておいたが、それ以来遅くなる度合いはますます進行している。そのため声の話のかなりの部分が、私の頭のなかに響くシューシューという音(**Gezisch**)でしかなくなっている。そこになんとか一語一語を聞き取れるのは、……自分の記憶に照らして、どの無意味な常套句が次ぎに出てくるか、私にはほとんど前もってわかっているからである。」（強調、引用者）
>
> (EA. S.272, 邦訳:シュレーバー『回想録』（平凡社）p. 273)

シュレーバーには、日に何百回となく、同じ無意味な常套句が聴こえてきます。彼にはそれが苦痛でなりません。例えば、<aber freilich>といった文句です。しかしこの文句の間が空くと、<a－a－a－a－b－e－e－e－r－fr－ei－ei－ei－li－i－i－i－ch>(EA. 223)といった具合になります。この間延びした

間隔にZischenが聴こえてきます。「そこになんとか一語一語を聞き取れる」というフレーズに着目すると、ここではZischenは言語化さるべき、あるいは、解読さるべき言語の「原液」のようなものです。シュレーバー自身、「自分の記憶に照らして」でないと、それを解読できないのです。

ラカンはシュレーバー症例を扱ったセミネール、『精神病』でこう述べています。

> 患者を最も驚かすのは、患者がそれを最もはっきりと聞く場合ではありません。非常にありありとした幻覚が、幻覚にとどまり、幻覚として認識されるのに対して、他方では内的言語としての性格がかなりはっきりしている幻覚のほうが、かえって患者にとって非常に決定的な性格を持ち、患者にある確信をあたえることがあるのです。
>
> （ラカン『精神病』（上）岩波書店　p.183）

この逆説は、患者が、聞き取りにくい「声」の解釈者として登場しているから起るのではないでしょうか？だから聞き取れるか聞き取れないかの微かな音が、内的言語の性格を帯びるのではないでしょうか？

カフカとシュレーバーの最大の差異は、カフカの『巣穴』の主人公が**Zischen**を脅威、威嚇と感じるのに対し、シュレーバーではZischenはまったく威嚇とは感じられていません。むしろ「声」からの解放として、安堵として感じられています。

これに対しカフカの場合Zischenは、言語の原液ではあっても、＜判決＞の前駆、先触れとして感じられています。シュレーバーではZischenは、言語の消退局面であり、言語の退却とともに、「官能的愉悦」が高まってきます。常套句(「声」)と官能的愉悦は逆比例の関係にあります。

> 私の身体における魂の官能的愉悦が高まれば高まるほど、……それだけ声の話すテンポを遅くせざるをえないのである。……そのためいまや声のシューシューいう音は、例えば、砂時計の砂が落ちるときにたてる音の反響に近いものになってしまっている。　(Schreber, EA.S.311)

官能的愉悦というのは、シュレーバーが42歳のとき帝国議会議員選挙に立候

補し、落選した後、発病し、入院した大学付属病院の精神科主任フレヒジッヒ教授と関係があります。フロイトの分析によれば、シュレーバーはフレヒジッヒ教授に同性愛的な愛着を感じ、これを抑圧するために、彼を迫害者に仕立て上げます。フレヒジッヒは、シュレーバーを女に変えて、彼を「性的に濫用する」存在になります。同時にフレヒジッヒは神格化され、「神なるフレヒジッヒ」となり、パラノイア特有の「分割」（ヒステリーは「圧縮」を用い、パラノイアは「分割」(Zerlegung) を用いる。Freud GW Ⅷ-285) の手法によって、フレヒジッヒは「上位のフレヒジッヒ」と「中位のフレヒジッヒ」に分割されます。それと平行して、神も「上位の神 Armuzd」と「下位の神 Ariman」とに分割されます。下位の神から発される光線がシュレーバーの神経に「神経接合」されることによって、魂の官能的愉悦が生じるのです。これは幻想のなかの（肛門）性交と考えられます。

カフカが『巣穴』を書いた状況はこのようなものでした。

> 私の課題は、さしあたりどこかの穴に潜り込んで、自分を聴取する (**abhören**) こととなるでしょう。私のなかの（まだ）生きている人間は、もちろん希望を抱いています、しかし（私のなかの）判決を下す人間 (**Der Urteilende**) は、希望を抱いてはいません。しかしながら判決を下す人間は、もし私がそこの穴の中で自分を始末するとしても、それは私ができる最良のことをしたのだと、言います。　(F 647, 1916-1-18)

「自分を聴取する」という表現は、Zischen の音源が自分自身である、ということを示唆しているのではないでしょうか？「生きている人間」の方が、『巣穴』の主人公です。「判決を下す人間」、すなわちカフカの超自我は、『巣穴』には現前という意味では登場しません。シュウシュウ Zischen 音をたてる「地中の敵」、主人公を窺う恐ろしい敵として、暗示されているだけです。「判決を下す人間」の「この穴の中で自分を始末するとしても、それは私ができる最良のこと」という言葉は、ギリシャ悲劇の『オイディプス王』の言葉、「人間にとって最良のことは、すぐに死ぬことだ」を想起させないでしょうか？『判決』でゲオルクは父の死刑宣告を、自分の意思として執行します。父の宣告を迫害としてではなく、自虐的に執行することで、カフカは迫害妄想から逃れます。ゲオルクは自殺の直前に「愛するお父さん、お母さん、私はいつでもあなたたちを愛していました」(D 61) とさえ言います。主人公ゲオルクが恨みを抱い

て死んでいくのではなく、父の死刑宣告を心から受諾したメランコリーの典型として死ぬのです。

『変身』では、妹が宣告を下します。もしあの虫がグレーゴルなら、「そんな獣との共同生活は不可能だ」と悟って、「自分から出て行ったでしょう」(D 191)と。グレーゴルは「自分が消えねばならないという点では、彼の意見は、妹の意見よりもっと断固たるものであったかもしれない」(D 193)と言います。グレーゴルは妹を迫害者と思う代わりに、家族のことを「感動と愛の念」で振り返ります。『変身』の第1部の終わりで父がグレーゴルを Zischen で彼の部屋に追い返す場面があります。カフカは『変身』の挿絵に、虫を描くことを禁じ、部屋のドアが開かれ、闇を湛えた部屋を描くように指示しました (Br. 135f., 1915-10-25)。**Zischen** は「父」=超自我が自我を闇へと追い払うシッシという音であると同時に、穴の闇の中で最後の判決が下るその予兆を告げる音です。それは真実の感情が地底から、マグマに先立つ蒸気のようにシュッと噴出す音、判決の言葉の先触れだからこそ、『巣穴』の主人公は Zischen にパニックを起こすのではないでしょうか？

文献と略号（**Literaturhinweise und Abkürzungen**）

A）**Primärliteratur**

1）**Kafka, Franz: Schriften, Tagebücher, Briefe. Kritische Ausgabe. Hg. von Jürgen Born, Gerhard Neumann, Malcolm Pasely und Jost Schillemeit. Fischer. 1982ff.**

D　Drucke zu Lebzeiten. 1996.

N Ⅰ　Nachgelassene Schriften und Fragmente. Ⅰ 1993.

N Ⅱ　Nachgelassene Schriften und Fragmente. Ⅱ 1992.

T　Tagebücher. 1989.

Kafka, Franz: Gesammelte Werke. Hg. v. Max Brod. Fischer.

Br.　Briefe 1902-1924. Hg. v. Max Brod. Fischer, 1958.

F　Briefe an Felice und andere Korrespondenz aus der Verlobungszeit. Fischer,1967.

M　Briefe an Milena, Erweiterte Neuausgage 1983. Fischer

BKB　Max Brod/ Franz Kafka, <Eine Freundschaft>. Bd. Ⅱ, Briefwechsel.

Hg. V. Malcolm Pasley. Fischer, 1989.

2）**Schreber, Daniel Paul** „Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken. Leipzig, 1903. hier zitiert nach Ullstein Buch Nr. 2967, Ullstein Verlag, 1973. Seitennummer nach ersten Ausgabe 邦訳:シュレーバー『回想録』尾川浩＋金関猛　訳（1991年、平凡社）

初版本は、入手しがたい稀覯本であり、引用はこの Ullstein の復刻版（文庫本）によったが、この文庫本には初版の頁が並記されている。邦訳（『シュレーバー回想録』、平凡社、1991年）にも初版の頁数が並記されているので、照合の便のために、参照した文庫本ではなく、初版の頁数を挙げた。従って本文中の略号も、EA を用いた。不格好ではあるが、Ullstein の復刻版の頁うちに従っていないことを示したかった。

B）**Andere Auroren**

Sé Ⅲ　Lacan, Jacques: Le Séminaire de Jacques Lacan. Les Psychoses. Édition du Seuil. 1981（邦訳：ジャック・ラカン『精神病』（上）、（下）岩波書店　1987）

GW　Freud, Sigmund: Gesammelte Werke in 18 Einzelbänden. Fischer 1940～1968　(Liz. von Imago Publishing, London)

注1）

a）Emrich, Wilhelm: Frnaz Kafka, Athnäum, 1965. S.173 ここでエムリッヒは自伝的探求に関する断章と『巣穴』（巣穴は単に Bau＝建築と呼ばれている。）の建築を同一視している。その断章は、 Franz Kafka;Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande S.388 = Kafka:Nachgelassene Schriften Ⅱ 373に見られる。

b）Politzer, Heintz; Franz Kafka, der Künstler, Fischer, 1962. S.452 「『巣穴』はほとんどアレゴリー風に、カフカ自身の文学作品と同一である。この物語じしん彼の作品の一部をなすので、物語は絶えず自己参照するのである。」

c）Fingerhut, Karl-Heintz; Die Funktion der Tierfiguren im Werke Franz Kafkas. Bouvier, 1969.　S.189-200. S.224-225 特に S.190「この巣穴を作る動物は、作家の自画像であるという、しばしば研究で引用されるテーゼは、多くの点で正しい。」Fingerhut は、それまでのカフカ研究者たちの意見の対立を、10項目に渉って纏めている。cf. S.196-199.

d）Binder, Hartmut; Kafka Kommentar zu sämtlichen Erzählungen, S.302　ビンダーは、『ある犬の探求』と『巣穴』とをカフカ後期の自伝的物語として挙げている。